

2016年12月10日(土)

「海洋ごみシンポジウム2016」

大量生産・大量消費・大量廃棄 の社会システムから、 資源循環型の社会システムへ

生活協同組合パルシステム東京

理事長 野々山 理恵子



pal*system

パルシステム東京

生活協同組合パルシステム東京【組織概要】

理 念 : 「食べもの」「地球環境」「人」を大切にした
「社会」をつくります。

事業エリア : 東京都全域（島嶼除く）

設 立 : 1970年4月1日

組合員数 : 45万人（2015年度末）

総事業高 : 726億円（2015年度末）

主な事業種 : パルシステム事業（宅配）、福祉事業

パルシステムは、国産・産直・環境にこだわり、安全・安心な食材などを提供。
エネルギーに関しても環境保全、資源循環型社会を目指しています。

日本における生協運動の起因

生命を脅かした当時の深刻な社会状況

- 1955年「森永砒素ミルク中毒事件」(1万数千人の子どもが中毒。130人が死亡)
→ 森永製品不買運動
- 1956年「水俣病」の公式発見、日本窒素水俣工場廃水によるメチル水銀が原因
→ 現在も苦しみと闘いが継続 時の権力はなかなか否を認めようとしなない。
- 富山県神通川流域のイタイイタイ病(神岡鉱山の кадニューム廃水)
- 新潟県阿賀野川有機水銀中毒(昭和電工の工場廃水による有機水銀中毒)
- 石油コンビナートによる公害病、光化学スモッグ、東京湾や伊勢湾の汚 染等々
- 農業の近代化・産業化のかけ声と共に、農薬・化学肥料の多投、機械化、基盤整備
→ 環境汚染、安全性への危惧、農家自体が被害者に
- 1968年「カネミ油症事件」(米油にPCB混入、1万4千人以上の健康異常の訴え)
- 1971年～コメの減反政策始まる → 耕作放棄地の増大
- 1973年第一次オイルショック(中東紛争による原油高騰～トイレットペーパーや生活物資が不足する) → 売り惜しみ、買い占め
- 合成洗剤による河川、湖沼の汚染、汚濁、等々 → 合成洗剤追放
- 多量の安い外材の輸入 → 熱帯雨林の簞奪、山林の荒廃 → 地域荒廃、花粉症



パルシステムグループの歴史

- 1977年首都圏生協事業連絡会議

1都4県15生協、組合員37,750人、1億8千万円(統一仕入 PB開発(石けん、牛乳) 食肉加工品 会社 青果・米の産直 システム統一)

- 1990年生協連合会首都圏コープ事業連合

1都5県16生協、組合員13万人、293億円、個配システム、商品・媒体統一

- 90年代には、県内連帯・合併を推進。2000年にはほぼ現在の姿に

- 1997年環境保全型生産との提携「フードプランガイドライン」

- 2001年個人対応型無店舗事業戦略のもと商品カタログのライフステージ別展開

- 2005年パルシステムに名称変更

- 2006年から福島、群馬、静岡の新しい仲間が順次加盟。栃木を除く1都8県へのエリア展開へ
(栃木は現在、パルシステム茨城のエリアに)

- 2014年新潟総合生協、生協あいコープみやぎが加盟

- 「タベソダ」サービス開始

- 2015年 「きなりセレクト」サービス開始

- 2016年 (株)エコサポートを(株)パルシステム電力に改称

発電事業を担う子会社、(株)パルシステム発電を設立



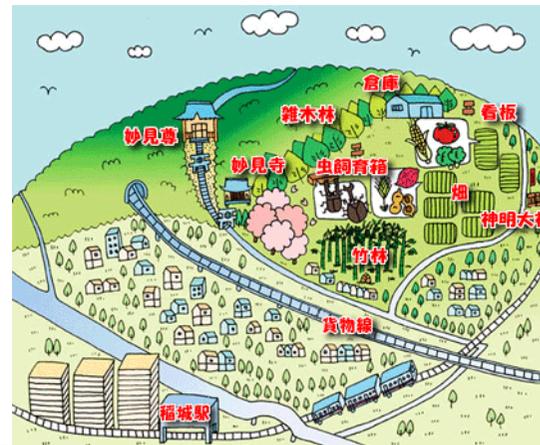
パルシステムグループ資源循環型地域づくりへの取り組み



「野付の「ふ~どの森」植樹活動」



「カタログ『イキル・道具』」



「いなぎめぐみの里山」



「ペレットストーブ」



「千葉市小山町観音地における里山と自然の復元活動」



「埼玉県百年の森を守る会」



「山梨森の紙」



「スリランカ森林再生プロジェクト活動支援カンパ」

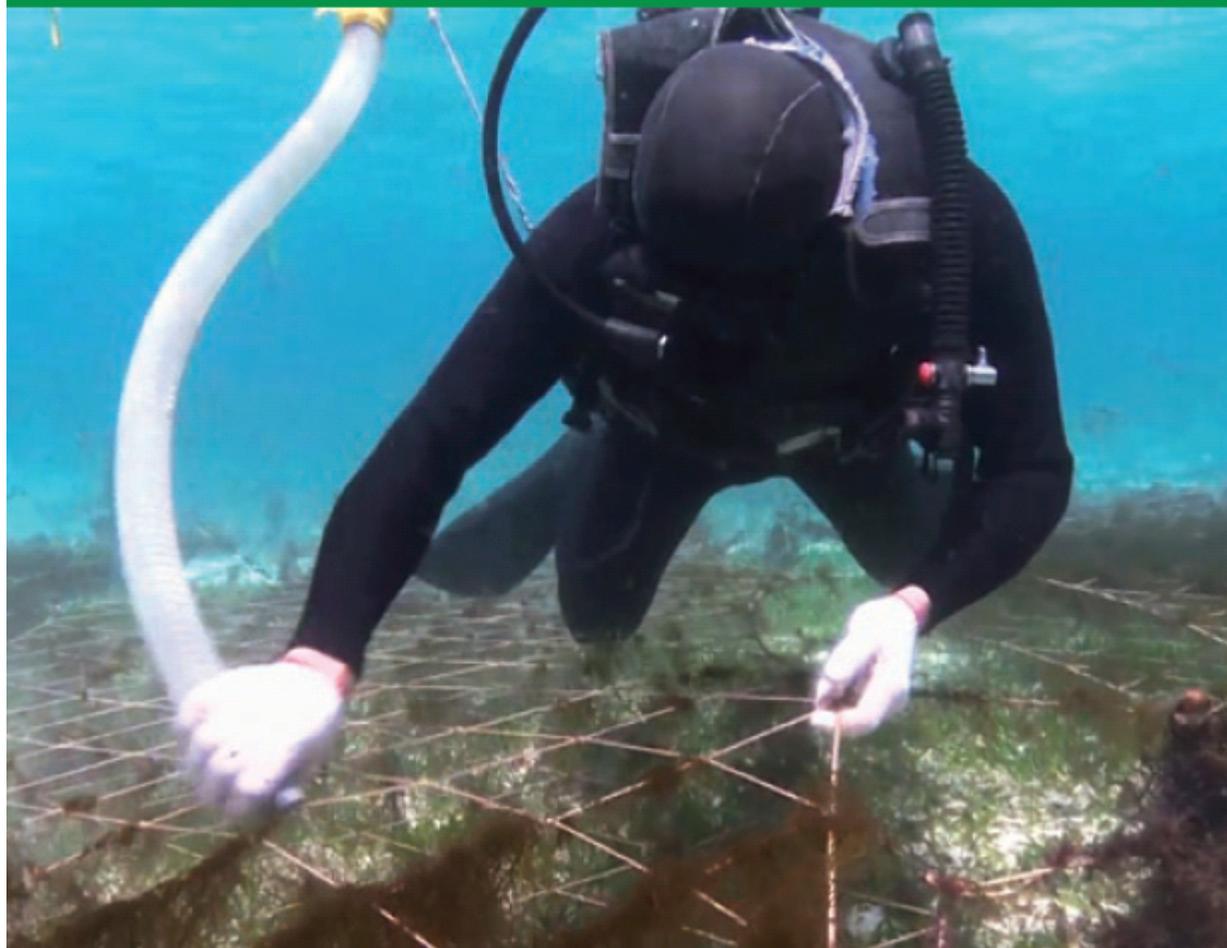


生しいたけ（原木栽培）



自然の恵みをいただくからこそ 持続的な水産業の実現へ

水産資源の保全や回復などが課題となっている水産業。パルシステムでは2009年1月に「水産方針」を策定。水産業・漁業者と連携しながら、水産物の持続的な利用を実現する事業や運動に取り組んでいます。



産直提携産地……10

point-1

海の環境を保全し、
水産資源を持続的に利用

point-2

日本の水産業再生に
取り組む

point-3

水産物の安全性を追求

point-4

日本の魚食文化を
大切にする

4つの水産方針を基準として、
産直協定を結んでいます。

養殖用の網で生育した「恩納もずく」を収穫する
恩納村漁業協同組合(沖縄県)の生産者

pal*system

パルシステム東京

「サンゴの森づくり」プロジェクト

海の環境を守り育てるために恩納村美ら海産直協議会を設立(2009年)し、もずく商品の利用額の一部を活用してサンゴの植え付けを推進してきました。これまでのサンゴ植樹本数は7,300本(2015年度末現在)となりました。



サンゴに群がる魚のようす



交流ツアーでは「サンゴの苗」作りを体験



全国豊かな海づくり大会で「環境大臣賞」を受賞しました

森は海の恋人

「牡蠣の森を慕う会」代表。京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携島山重篤教授より



「森」を育むことは、「川」「海」を守る → 『森林方針』

「水」を守ることも、「森」「川」「海」を守る → 『石けん運動』

パルシステムと石けん運動の歴史

●1970年代 “公害列島”といわれた日本

『パルシステムの成り立ちと背景』

- 「牛乳、卵、そして石けんが、私たちの生協の成り立ち」
- 「70年代の公害と合成洗剤の問題→「生活者自身が自分の生活/環境を危くしている事に気づいた。」

『合成洗剤問題に対する取り組み』

- パルシステムの運動としての取り組み
→合成洗剤追放と企業責任追及を伴う合成洗剤返還運動（売らない、買わない、使わない）



昭和46年(1971年)の多摩川

廃棄物削減取り組み

- ・リユースびんシステム
- ・各種リサイクルの実施
- ・2R(リデュース・リサイクル)社会へむけて
- ・「容器包装リサイクル法」の改正に向けた署名活動
- ・プラスチック容器包装の改善(薄肉化)
- ・様々な廃棄物・化学物質削減に向けたパブリックコメント、意見書提出

組合員。役職員への 啓発と取り組み呼びかけ

- ・洗びん工場見学会(リユースびん)
- ・製紙工場見学会(紙パックリサイクル)
- ・「容器包装リサイクル法」学習会
- ・毎年6・7月の環境キャンペーンでのリユース・リサイクル品の回収率向上の取り組み

署名活動

2003年度

「容器包装リサイクル法」改正署名運動

期間:2004年1月～3月末

80,851筆 (全国934, 560筆)

【パルシステムグループ261, 816筆】

2010年度

リデュース・リユース促進法にむけた署名活動

期間:2010年10月～11月

15,121筆 (全国394, 165筆)

【パルシステムグループ52, 396筆】

pal*system

パルシステム東京

『生活用品への6つの想い』

- ①商品の成分や材質の基準を設けて、安心して安全な商品をお届けします。
- ②森林を育み、「森」「川」「海」の環境を守り、石けん運動を広めます。
- ③再生原料の利用を推進し、限りある資源を有効に活用します。
- ④文化や技の継承・発展、国産のものづくりを応援します。
- ⑤「もの」を長く使い続ける良さを伝えます。
- ⑥組合員の声を反映させた商品づくりを大切にします。

3Rで廃棄物削減

<リユース・リサイクル対象>

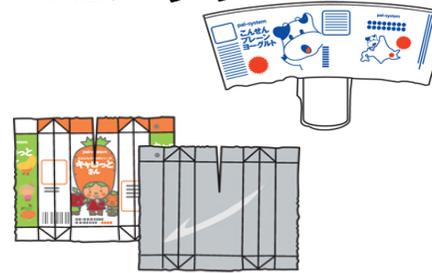
商品カタログ



紙パック



ヨーグルトカップ
ABパック



たまごパック



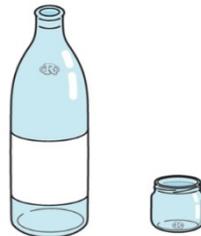
資源プラスチック類



青果用外箱



リユースびん



米袋



お料理セットトレー



資源循環型の社会へ——リユース&リサイクル

パルシステムでは資源循環型の社会をめざして、組合員とともに包装容器等のリデュース(発生抑制)、リユース(再使用)、リサイクル(再生利用)活動に取り組み、回収対象容器の拡大と回収率の向上をすすめています。

とくにリユースびんは回収率が上がると大きな省エネルギー・CO₂削減効果が期待できるため、対象商品の拡大や組合員への広報など、積極的に取り組んでいます。

2015年度の回収率

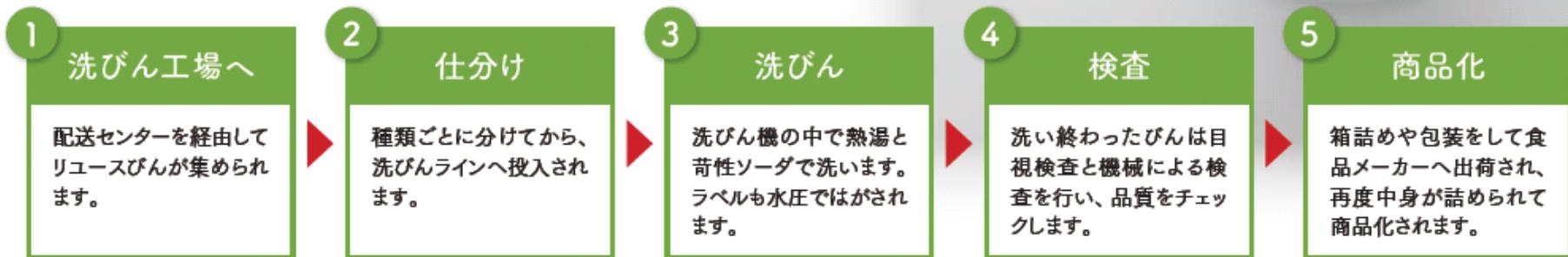
リユースびん
59.4%

紙パック
74.5%

商品カタログ
76.0%

リユースびんの流れ

パルシステムから洗びん工場に運ばれ洗浄されたあと、パルシステム商品のメーカーにて中身を詰め、商品化されます。



リユースびんの目印

森林保全の取り組み



ウッドスタート宣言調印式



「ぱる★キッズ府中」では、多摩産材を指定して内装を木質化し、木育に積極的に取り組んでいます。



杉の間伐材を使った
パルシステムオリジナルのPB
商品『どっちかな積み木 2段』

地域の森林保全取り組みとして、多摩産材の杉の割り箸をジュオンネットワーク、社会福祉法人山の子の家と協働して区供給しています。



pal*system
パルシステム東京

海洋ごみに関する取組み



プラスチックボトル等

現在、パルシステム東京ではペットボトル飲料は取り扱っておりません。

ペットボトル飲料についても、パルシステム東京として学習会や、組合員討議等を通して供給するか否かの議論をしております。

配達業態ですので、どうしても、におい移りなども含め、商品の保全のために使用せざるを得ない容器包装もあります。包装の薄肉化などを行い、必要最低限の使用にとどめられるように調査研究を行ってまいります。



プラスチックの海洋汚染について

パルシステム東京では、4年前から東京農工大学高田秀重教授の問題提起に賛同し、毎年の連続学習会を継続して行っております。

①プラスチックのゴミがPCBなどを吸着し海に漂いながら海洋を再汚染することや、環境ホルモンとしての作用が懸念されている等から有害化学物質問題として捉える。

②海鳥や、貝、魚などの海の生態系に影響を与えるほどの問題となっている

③プラスチック製品の過剰な使用が廃棄物として、地球環境の限界を超えている。

最後に

- ✦ まだまだ道半ば、できること、できていないことはたくさんあります。
- ✦ 地球のいのちを守るために、全員で更に学習を重ね、
- ✦ プラスチック製品を減らし、容器包装の回収などリユースに更に取り組んでいきたいと思えます。
- ✦ これからも、一人ひとりができることを追求していきます。
- ✦ ご静聴ありがとうございました。

